

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

関西外大と歩んだ40年間の報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学留学生別科 公開日: 2025-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鹿浦, 佳子 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学外国語学部
URL	https://kansaigaidai.repo.nii.ac.jp/records/2000353

関西外大と歩んだ 40 年間の報告

鹿浦 佳子

私の日本語教育の人生は津田塾大学院の M1 の途中、国立国語研究所（以後国研）での第 2 期日本語教員養成研修生となった時から始まった。国研での研修の直後に院を休学し米国の Michigan State University の大学院において TA をしながら言語学コースを修了、帰国後津田塾大学院を修了し当時非常勤講師をしていた国研の指導教官であった上野田鶴子先生の紹介で関西外国語大学（以後外大）に赴任したのはもう 40 年以上前である。

赴任した 1983 年当時は外大の留学生別科（以後留別）秋学期の留学生は 116 名で現在の約 4 分の一の学生数しかなかった。日本語教員は私を入れた新任 3 名を加えて 5 名、studio コースの陶芸クラスも新設され担当の教員の猪股氏は赴任時の同期であった。1982 年に完成した片鋒メインキャンパスと道一つ隔てた 3 階建ての谷本国際交流会館が留別の建物であった。当時山本甫国際交流課長（後国際交流部長）が日本の習慣を重んじ館内は土足厳禁であった。留学生は皆靴を脱いでスリッパに履き替え館内を移動しなければならない。靴箱はもちろん数が足りず、玄関ホールには一面アメリカサイズのステーキ程の大きさの靴が脱ぎっぱなしになっていて、その光景は圧巻であった。当たり前のことだが自分の靴が見つからないという靴紛失事件が絶えなかった。また外国人留学生はスリッパには歩きなれていないし日本人仕様のスリッパは小さすぎ履きにくいし、特に階段の上り下りでは苦勞していたようで、靴下や裸足のまま歩く学生も多かった。

機材、器具の進化の歴史も見て来た。ハンドアウトは手書きで元原稿を作成し、デイトーという機械で複数枚印刷する。今クラスではコンピュータで PPT を使用して文字、絵、動画も見せられるが、当時は自分で作成した教材を透明のスライドに複写し、OHP でスクリーンに投影し学生に見せていた。絵カードも使用し、リアルの梨や柿を教室に持ち込んでクラスをしていたものだ。そのうちワープロが登場し字が下手な私の助けとなり、アップルコンピュータが登場。記録媒体もフロッピーディスク、次 CD、DVD と続く。今は死語となった LL 教室で聞き取りや話す練習をする時間が時間割に組み込まれ、課題の音源を入れたカセットテープを留学生に聞かせ録音練習もさせていた。映画やテレビの録画に関しても、今やお目にかかることも難しい U-matic、VHS、

ベータテープなどを使用していた。今となっては時効であるが、学生が録音した課題のカセットテープを自宅で採点して大学に持ち帰る途中、京阪電車の棚に置き忘れたことがあった。冷や汗をかきながら急ぎ次の樟葉駅の忘れ物の部署まで引き取りに行った苦い記憶がある。もちろんラベルに **Listening Comprehension** と書かれたカセットテープの山を持ち去る人は誰もいなかった。

日本語クラスは毎日の練習と繰り返しが大切であるという信念で、多くのアメリカの大学と同様月曜日から金曜日まで 50 分授業を毎日行っていた。日本語の会話クラスは必須で読み書きクラスは選択だったが、読み書きも履修できるよう午前中の 1 限から 4 限の中で会話と読み書きのレベルセクションの時間割を決めた。コンテンツコースは日本語クラスとバッティングしないように午後の時間割であった。会話クラスと読み書きのレベルが異なる学生が多くいたが、読み書きクラスの履修を奨励していたこともあり、**placement test** を行い学生の会話と読み書きのレベルが判明した直後、留学生が希望すれば読み書きクラスも履修できるようにするため教員で頭を突き合わせパンタグラフかパズルでも作成するかのような複雑なスケジュール作成を手作業で夜遅くまで行っていた。今となっては懐かしい。月曜日から金曜日まで毎日 50 分クラスがあることは学生にとっては効果的かもしれないが、学期中教員は次の日の準備やクイズやテストや宿題の添削に追われる日々であった。2015 年春学期から学部のカリキュラムに準じて 1 コマ 90 分、週 3 回の日本語会話の授業となるカリキュラム改正が行われた。

留別の専任教員は学部でも最低 1 コマ教えなければならない。留別のカレンダーは留学先の国、主にアメリカに合わせて春学期は 2 月から 5 月末までである。学部のクラスは 4 月から 8 月上旬までであるため、留別の専任教員は春学期は 1 月下旬から 8 月上旬まで拘束される。このため提携校からの要望や問い合わせが多かったサマーコースを作ろうにもその時間も取れず、設立の実現が難しかった。

しかし、週 3 回 90 分授業へのカリキュラム改正と同時に春学期の学部授業を交代制にしたことで、2015 年の 6 月～7 月にサマープログラムを立ち上げることができた。当初、午前中は月曜日から金曜日まで毎日日本語 I のクラス、午後はコンテンツコースを 1 コマ設定し、週末や午後は京都の寺社仏閣のフィールドトリップ、甲子園球場への野球観戦、ホームビジットプログラムへの参加、お茶・お花・浴衣の着付けや盆踊りなどの日本文化を体験するイベントも設けた。コロナ渦、またそれ以降のクラスは日本語 I、II、ビジネス日本語、関西弁、超初級者コースなどのクラスをオンラインで続けている。

日本語教員養成課程は 1987 年から始まり、4 年時に行われる日本語実習は 1990 年から行った。提携校に TA として派遣する『日本語インターン留学』プログラムは 1990-91 年度 3 名の派遣から始まった。このプログラムの目的は、日本語教員を目指し日本

語教員養成課程を履修している学生に対し、大学レベルでの日本語教授の経験を積み
せキャリアパスを与えることである。日本語教員養成課程の実習生と日本語インター
ン留学プログラムのインターン生の人数の推移のグラフは図1となる⁽¹⁾。

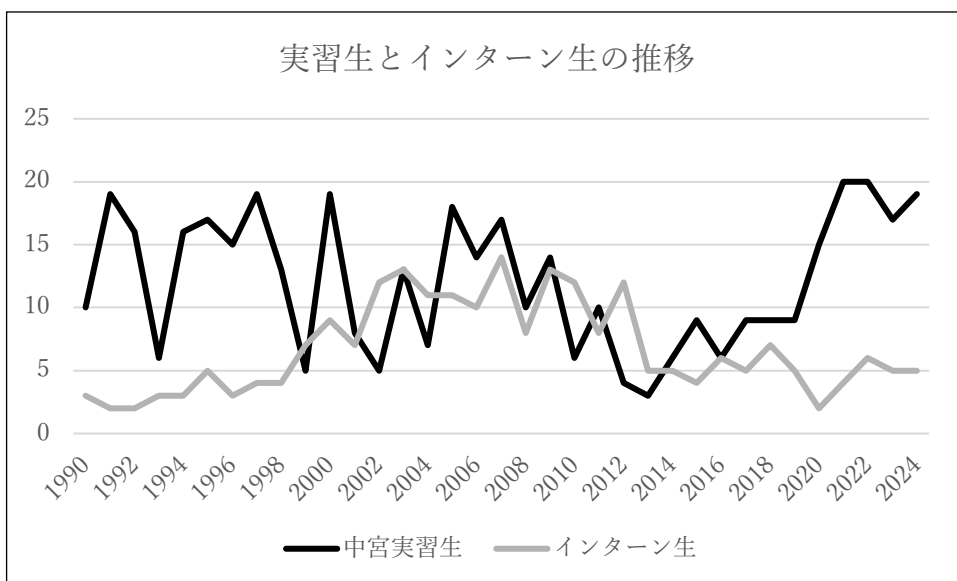


図1 日本語実習生とインターン留学のインターン候補生の推移

派遣大学もはじめは3校であったが、提携大学も増え最高のは28校であった。海外の大学における日本語のプログラムの大きさは日本の経済力と比例するため、日本経済が落ち込むと大学から予算が削られ教員数も削られ、最悪の場合プログラム自体が消滅する。派遣できる提携大学は時の流れと同時に増減しながら変わっていった。日本語養成課程修了者も数も増減するが提携校に派遣できる学生数も増減する。希望する学生を派遣してあげたいが、最近提携校から出される派遣者への条件が厳しくなり、条件を満たさない学生を派遣すると提携を中止される。しかし、スタッフ、携わった教員、派遣学生の努力のおかげで開始以来34年間継続を絶やしたことはない。コロナの時期も留学が出来ないもののオンラインでTAの派遣を続けることができています。インターンを終えた人の動向としては日本で日本語の教員になった人、日本で英語の教員になった人、海外の大学で日本語教育に携わっている人など様々である。関西外大に日本語講師として戻って来てくれた卒業生も増えつつある。

2002年3月下旬に外大は民族大移動を行った。片鉾から新中宮キャンパスに一週間で全学引っ越しという強硬策を行ったのである。大変なのは留別の我々教員であった。学期の真最中であったため、授業を行いながら、引っ越しの荷作り、引っ越し、荷ほどきを約2週間のタイムリミットで行わなければならなかった。整理の苦手な私はそ

の時の引っ越しの整理が未だ片付いておらず、私の研究室はずっと地震（実際 2018 年に大阪北部地震があったが）の後の様に乱雑なままである。

地域社会との交流、貢献ができないものかと考え 1998 年に枚方市教育委員会や外大生のボランティアサークル『ひまわり』の支援を得て、小学校訪問プロジェクトを立ち上げた。地元枚方市内の小・中学校に留学生が赴き、子供たちと給食を食べ日本語で話し書道やうどん作りなどの日本文化体験ができ、児童・生徒に対しては国際理解教育の一環として異文化と触れ合い将来豊かな国際感覚を養うのに役立っていた。これも留学生の数が 400 人体制になると連絡、調整が難しくなり 2006 年に中止することになった。

外大の交換留学の特徴の一つはホームステイ家族の質と量の充実であった。しかし 2018 年に新しい御殿山キャンパスと国際寮である YUI が出来ると、寮内の日本人学生との交流が盛んにおこなわれ、快適な寮の人气が高くなり、ホームステイを希望する留学生が減っていった。決定打としてコロナ渦でホームステイが中止になり、それ以降もホームステイプログラムは回復が遅れている。

外大にとって試練の時は数回あった。まず 2000 年 9.11 のアメリカ同時多発テロの時である。当時日本で一番多くのアメリカ人留学生がいたのは関西外大ではなかったかと思う。次の日は授業ができる状態ではなかった。

東日本大震災もまた試練の時であった。留学生は外大で勉強を続けたいと思っている一方、留学生の多くの家族が枚方も原発事故の影響があり留学生生活は危ないと考え、たくさんの留学生が泣く泣く帰国していった。暫く留学生の減少が続いた。

世界中を揺るがせたコロナ渦においては、外大にとって国際交流の要である留学が出来ないという致命的な状況であった。しかし、外大は即オンラインクラスに切り替えて留学生プログラムを続け、留学が出来ない代わりに、日本語日本文化を学びたい、単位が必要だという世界中の大学生への要望に応じて交換プログラムを一日たりとも絶やさなかった。

また悲しい思い出は留学生が事故で 2 人亡くなったことである。1 人はハロウィーンの夜、枚方公園の踏切で急行電車にはねられ亡くなった。もう 1 人はセミナーハウスから自転車ですり外大東門に来る途中で自動車にはねられ亡くなった。後者の留学生の葬儀に参列し、彼女を迎えに来ていたオーストラリアのご両親ともお会いしたが、その時は辛くてただお互い手を取り合うだけだった。

寂しいことは、鬼籍に入った同僚、仲間も多いことである。大曾先生、山本部長、猪股先生、キャッシー、マーク、ケニー先生。

外大はどのような試練にも即座に対応し、留学生の数は増え続け、中宮の留学生 500 人体制を超えようとしている。学期に 500 名を超えると教室も不足するし、当初中宮の別科に設置されていた留学生用のメールアドレスも全員に充当出来ず、今は使用中

止のもったいない状態にある。

今まで関西外大が受け入れた留学生は春学期と秋学期を合計して 19,000 人以上、延べ人数としては約 25,000 人である。(図 2 参照)

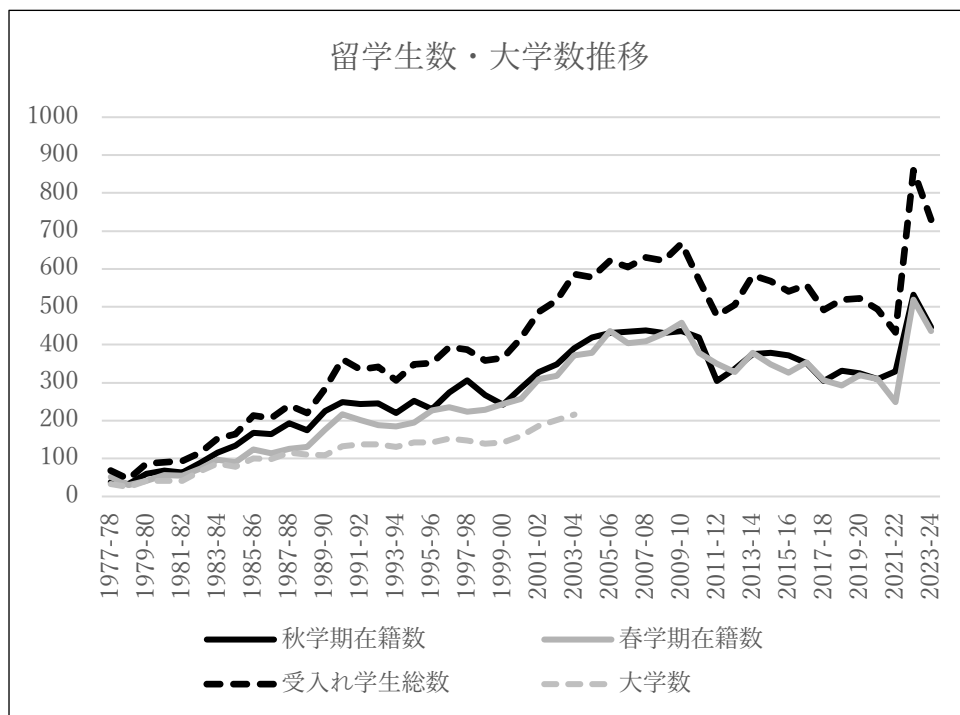


図 2 留学生数（春学期・秋学期の留学生在籍数、受け入れ留学生数）と留学生の大学数の推移のグラフ

そのうち私が担当した留学生の教え子の数はざっと 3,500 人になるだろうか。本籍大学を卒業後日本に戻ってきて再会した学生も多い。Jet Program で英語教師の ALT や市役所のコーディネーターの CIR として日本各地で教えたり、大学院に進んだ留学生も少なくない。2024 年の交換留学 70 周年にあたる同窓会では当時可愛かったのにすっかりおっさんになった教え子と 30 年ぶりの再会を懐かしんだ。昔外大は毎年留学生スピーチコンテストを主催しており、外大の留学生だけでは出場者が足りず他の大学からも募っていた。おしゃべり好きな 2 名をなんとか説得して参加させ私は審査員として出場した。当時我が外大の最高レベルは 7（現在のレベル 8 相当）で、この 2 人は私が担当していたレベル 6 のクラスの中にいた。他の大学からの参加者の留学生は大半中国勢で発音こそは自然ではないが語彙や表現は日本人に教えて貰ったのではないかと疑いたくなるほど上手かった。従って主催大学であるにも関わらず優勝、上位者は常に他大学に持ち去られていた。この時も 2 人の健闘むなしく入賞には届か

なかった。

外大との思い出はつきないが、40年間続けて教えてこられた理由は、人並みに健康であったことと、留学生に日本語を教えるのが好きだったことと、ある程度私に根性があったからだと思う。仕事である限り自己を犠牲にし、家族に負担を強いてでもやり抜いてきた。自負できることは、3回の産休以外、一度も別科のクラスを遅刻、休講したことがないことだ。休講しない、してはいけないと思い込んでいたのだ。その理由としては毎日クラスが行われていた時期の悲しい教師の習性からである。休むとカリキュラムが狂ってしまうし、補講する時間も取れないため他の同じレベルの教員に迷惑がかかる。絶対にクラスを休んではいけないという強迫観念が身体にしみ込んでしまったのだ。留別の期末試験直後、会議に向かう登校中に車にぶつけられ乗っていたモペットごと飛ばされ救急車で運ばれたことがある。意識が朦朧としていた中でも会議を休んではいけないという考えが頭をよぎり、運ばれた病院でMRI検査を受けた後、打ち身、擦り傷の満身創痕の状態でも大事な(?)会議に出席した。学期中は病気になってはいけないと思うと身体もそれに応えて耐えてくれ、学期が終わると身体のあちらこちらが不調となり、病院、歯医者通いで休みが潰れてしまうというサイクルが定着した。

何といっても長く教えて来られた一番の理由は、大学の理解、今の素敵な同僚仲間たち、数十人の外大を去って行った仲間たち、優秀なスタッフの協力のおかげである。一緒に楽しく仕事が出来たことは感謝してもしきれない。これからは皆さんの奮闘にエールを送ってバトンを渡す。

注

- (1) この実習生の数は英語キャリア学部、英語国際学部、科目等履修生からの実習生の数を含まない。